

戦時中の図書館長

山 田 雄 三

昭和十九年八月から同二十一年十二月にかけて、私は図書館長を勤めた。つまり戦時中の図書館長というわけであって、私が館長としてやった仕事といえば、貴重図書を疎開させ、戦後再び持ち帰ったことだけであるが、このことは極めて重要な事件であるのに、大学案内書などには一言も触れていないので、ここで当時の事情を書きしるしておきたいと思う。

昭和十九年といえば、戦局も一段と急をつげた時であった。その八月には学徒勤労令が公布され、十二月には学校の兼松講堂が中島飛行機株式会社の工場として貸与され、学生諸君はその油くさい講堂の工場で勤労することになった。また東京商科大学という名称が、商という字が営利主義を示すからという理由で、東京産業大学に改められたのも、その年の九月であった。図書館長に補せられた時の私の年齢は四十二歳、恐らく当時の高瀬荘太郎学長は図書館の戦時防衛を考えて、通例よりもやや若輩を抜擢されたのかも知れない。あるいは、先輩の方々のなかから適当な協力者がどうしても得られなかったからかも知れない。

それはともかくとして、私が図書館長としてやったことは、前述のように、貴重図書の疎開であった。一橋が誇り

としてゐるメンガー文庫、ギールケ文庫、その他の貴重書を選んで、四万冊ばかりを信州伊那の図書館に疎開させたのである。この図書館は地方にはめずらしい鉄筋づくりで、なかなか立派なものであった。当時の記念の写真をいまでも大切に保存しているが、それは高瀬学長を中心に、私や山口隆二君（図書館幹事）や伊那の方々が立派な図書館の正面にゲートル姿でならんでいる写真である。

この貴重書疎開でとくに思い出されるのは、大きな頑丈な木箱を七、八百箇ばかり調達した苦心である。高瀬先生と相談して、たまたま兼松講堂を使用している中島飛行機株式会社に箱の製作を頼むことにし、当時三鷹（いまの国際基督教大学の敷地）にあったその本社に先輩の常務を訪ねたことがある。三鷹の駅におりた時、ちょうど空襲にあつて急いで井之頭公園の方面に避難したが、そのあとの中島本社のテナヤワンの光景はいまでもまざまざと思い出される。とにかくこうして当時としてはなかなか立派な木箱が出来あがつてホッとしたが、某教授がその木箱を私用のため譲ってくれといわれて困ったことも、思い出される。

因みに元司書川崎操氏が私の問い合せに対し調べてくださった数字をここに付記しておこう。伊那へ疎開させた主たる文庫の冊数—メンガー文庫一八、六〇二冊、ギールケ文庫九、八五八冊、左右田文庫六、五〇九冊、貴重書（一八五〇年以前の洋書その他）約五、〇〇〇冊である。木箱の大きさは $90 \times 45.5 \times 30$ センチのものや、 $74.2 \times 42.6 \times 26.6$ センチのものなど。木箱を送り出したのはだいたい二五〇箇所ずつ三回（三月十日、三月三十日、六月十五日）にわたる。

私自身は経済学説専攻の立場から、よくメンガー文庫を利用したが、そのなかの稀覯書やメンガー自身の書き込みのある書物についてのいろいろな思い出は、別の機会に述べよう。それは英独仏その他の古い経済学書一万余冊を含み、世界でもコロンビア大学のセリグマン文庫や、イタリアの元大統領エイナウディの私蔵図書などとならんで、有

名なものである。

幸いに国立にある図書館そのものは戦禍をうけなかったから、戦時中の貴重書の疎開は結果的には無駄骨に終わった。世の中が乱れているときには、学問の心を守りぬくために、こういう無駄骨も止むを得ないのだと、いまでもつくづく思い返す次第である。

〔本稿は、かつて『如水会々報』昭和四十四年九月号に掲載したものであるが、図書館長としての私の思い出は、ほぼこれにつきるので、そのまま再録していただくことにした。文中数カ所補筆を加えた〕

(元一橋大学附属図書館長、一橋大学名誉教授)